Ханда Михо

ПРАКТИКА ПРОВЕДЕНИЯ СОВМЕСТНЫХ ЗАНЯТИЙ МЕЖДУ ЯПОНСКИМИ И БЕЛОРУССКИМИ СТУДЕНТАМИ В РАМКАХ КУРСА ИЗУЧЕНИЯ ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА

日本人留学生との交流授業の実践と課題

В статье представлены результаты исследования, целью которого являлось изучение проблем эффективности языкового общения белорусских и японских студентов в рамках проводимых аудиторных занятий по изучению японского языка. В период с 2017 по 2019 учебные годы такие занятия проводились среди студентов начального уровня изучения японского языка. Занятия строились в три этапа: 1. Представление японских и белорусских студентов, знакомство. 2. Информационная презентация японских студентов о своей стране. 3. Обмен мнениями и впечатлениями.

1. はじめに

かつて海外での日本語教育の問題点として挙げられていた日本語教材の不足の問題は、インターネットの普及により、大きく改善されている。インターネットから入手できる日本語教材や、スマートフォンで利用できる日本語学習ソフト、辞書ソフトなども少なくない。インターネット環境さえあれば、日本語の音声や映像資料なども容易に入手できるようになった。一方で、日本語教材の中には、日本で生活する外国人を対象としたものも多く、海外の学生にとって日本での生活を前提とした教材は必ずしも使い易いとは言えない。また、日本語母語話者の教師数が限られている海外においては、教室の外で生の日本語を耳にする機会は少ない。このような状況において、現地の在留邦人との交流は有効な実践教育となり得る。

本稿は、ベラルーシのミンスク国立言語大学において実践した日本人留学生との交流授業の有効性と課題について考察することを目的としている。まず、日本語教育環境の概要について述べる。次に、日本人留学生との交流事業の実践について述べ、今後の課題について検討したい。

2.日本語教育環境の概要

2.1 日本語教育現場

現在、世界の日本語学習者数は400万人にのぼる。ベラルーシの高等教育機関における日本語教育は1993年に開始され、現在は首都ミンスクにあ

る2大学で日本語教育が行われている。ミンスク国立言語大学の通訳学部では、1993年以降、日本語を主専攻として学ぶ学生が5年に１度募集されており、大学1年次から5年次まで5年間日本語を学んでいる。また、主専攻の募集がない年は、副専攻として日本語を選択することができ、その場合は大学2年次から4年間日本語を学んでいる。近年は、学生からの希望により、通訳学部以外の学部にも日本語専攻のクラスが作られ、より多くの学生たちが副専攻として日本語を学ぶ機会を得ている。

2.2 教師陣

ミンスク国立言語大学の日本語教師は、現在、ベラルーシ人の常勤2名、日本人の常勤2名、ベラルーシ人の大学院生が１名の計4名である。2002年からベラルーシに国際交流基金の専門家が派遣されているが、現在は空席状態にある。学生数が増加傾向にある中、教師数の慢性的な不足が見られる。本学の夜間講座にも日本語コースがあるものの、教師不足により近年開講されていない。ベラルーシに限らず、海外日本語教育の現場では日本語を教える人材の不足が問題となっているが、ベラルーシでは全般的に教員の待遇が良いとは言えないことが、教員不足の理由の一つとなっていると思われる。

2.3 日本語学習者の動機

歴史的にロシアとの結びつきが強いベラルーシは、現在、政治・経済分野を中心に中国との関係が強まっている。ベラルーシへの中国企業の進出も活発で、ミンスク国立言語大学では中国語学習への人気が急速に高まっている。中国語を身に付けることで将来の就職に繋がるという意識を持った学生たちが多い。他方、ベラルーシ・日本関係は、まだ進展しているとは言い難く、日本企業の当地への進出も日本からの観光客も、限定的と言わざるを得ない。そのため、当地で日本語を使う仕事の需要は低く、大学卒業後に日本関係の職を得る可能性は低い。

それにもかかわらず、ベラルーシで日本語の学習希望者は増加傾向にある。国際交流基金の調査によれば、2012年のベラルーシの日本語学習機関における日本語学習者数は218人、2015年は305人に増加している。個人で日本語を学んでいる人を含めれば、その数はさらに多くなる。本学の学生

たちに日本語を専攻した理由を聞いてみると、「日本のアニメやマンガを見て興味を持った」という回答が最も多く、日本の文化、とくにポップカルチャーに興味があると答える学生が大半であった。しかし、多くの場合、学年が上がるにつれてポップカルチャーへの関心は薄まる傾向にあり、それと同時に日本語への興味・関心も失う学生もいる。また、将来の就職について考え始める高学年になると、日本語を学んでも就職に結びつかないという理由で、日本語を学ぶ意欲を失っていく学生も見受けられる。別の見方をすれば、ベラルーシの日本語学習者の多くは、将来の就職のためという合目的的ではない、純粋に日本文化や日本語そのものへの興味・関心に基づいている。実際、「日本語が好きだから」、「日本語が面白いから」という理由で勉強を継続し、日本政府奨学金制度を利用して日本への留学の機会を得ている学生も毎年いる。また、ベラルーシ外務省に就職して日本担当になる卒業生や、近年は本学から在ベラルーシ日本国大使館への就職する学生も出ている。したがって、教師の側にも、学生の動機が維持できるような努力や工夫が求められている。

2.4 日本語学習環境

2017年現在、ベラルーシの在留邦人数は70人程度である。近年、日本からの留学生は増加傾向にあるようだが、ベラルーシに進出している日本企業は数えるほどしかなく、そのうちベラルーシに駐在する邦人は今のところいない。そのため、日本語を学ぶ学生たちは、特に日本人の友達や知り合いと付き合いがない限り、大学外で日本語を耳にする機会は皆無に等しい。

また、本学は今のところ日本の大学との協定等に基づく協力関係がなく、日本政府奨学金制度を利用する他は、日本への留学の機会が少ない。ベラルーシの経済状況に鑑み、多くのベラルーシ人にとって日本への自費留学は高額であり、大学で日本語を学んでいながら卒業までに実際に日本へ行く機会が得られる学生は限られている。中にはベラルーシにいる日本人留学生と積極的に交流している学生もいるが、大半の学生は、大学の日本語教師以外に日本人の知り合いもいなければ、大学外で実際に日本人と話したことがないという。しかし、そのような場合、学生たちが大学で唯一の日本人教師の日本語の発音やイントネーションに慣れてしまい、他の日

本人の会話を聞いた時に理解できないという問題に陥る可能性がある。このような理由から、当地に留学している日本人学生をゲストとして授業に招き、ベラルーシの学生と交流する機会を設けることを試みている。

3. 日本人留学生との交流授業

2017年から2019年にかけて、主に初級前期から初級後期のクラスにおいて、日本人留学生との交流授業を実施した。ここでは、日本語を第一言語として学んでいる学生のクラスで実践した日本人留学生との交流授業について紹介する。授業は、次の表のような形態で実施した。表の①・②・③・⑥は、「ベラルーシの学生を通じて」、④・⑤は「日本の大学の知人の教授を通じて」授業に招待した留学生である。すでに述べたように、在留邦人の少ないベラルーシで、日本人留学生を見つけるのは容易なことではない。また、当地には「日本人会」のような日本人コミュニティはなく、本学には日本に協定校等もないため、たとえ本学に留学している日本人学生についてであっても、常に知り得るわけではない。従って、当地の日本人留学生の存在は、本学の学生を通じて知ることが多い。

表：日本人留学生との交流事業の実践例

	課題	日本人留学生		ベラルーシの学生の学年	概要
		数	ロシア語知識の有無		
①	自己紹介	1	有	1, 2	ベラルーシの学生と日本人留学生が互いに一人ずつ順番に自己紹介したあとで、質疑応答。
②	日本人留学生へのインタビュー	1	有	2	日本人留学生が自己紹介、出身地の紹介、日本の大学生活などについて話し、それに対して学生がランダムに質問。
③	日本人留学生へのグループ・インタビュー	6	有	2	ベラルーシの学生を6つのグループに分け、それぞれのグループに日本人留学生が1人ずつ参加し

					、日本人留学生にインタビュー。インタビューの結果をグループごとに黒板に書き入れて発表。
④	日本人留学生によるプレゼン発表	2	無	2	日本人留学生が出身地を紹介するプレゼンテーションを行った後、ベラルーシの学生がランダムに質問。
⑤	日本人留学生によるプレゼン発表	2	無	2	④と同様。
⑥	意見交換	1	有	3	「ベラルーシ人のここがヘン」「日本人のここがヘン」と思うところを互いに出し合い、意見交換。

3.1 自己紹介・インタビュー

初級前期の学習者の授業では、ベラルーシの学生が使用できる語彙や表現が限られているため、交流授業の課題は自己紹介やインタビューが中心となった。交流授業で自己紹介・インタビューを行った①・②・③・⑥は、本学または他大学で主にロシア語を学ぶ一定程度のロシア語が分かる日本人学生が参加した。日本人留学生がある程度のロシア語が分かる場合は、言葉に詰まった時や相手が理解していないかもしれないと思われた際に、互いにロシア語を交えれば話を続けられるということが多かった。しかし、そのまま日本語からロシア語の会話に切り替わってしまうケースも見受けられたが、そのような場合は教師が軌道修正することで日本語での会話に戻すことができた。

日本人留学生とベラルーシの学生の自己紹介やインタビュー、その後の質疑応答は、ベラルーシの学生たちにとって日頃の学習成果を教師以外の日本人を前に試すことができる貴重な体験となった。特に、日本人留学生が口にする「めっちゃ」「まじ」「やばい」など、教科書にはない若者の話し言葉や略語が、学生たちには新鮮で興味深かったようだ。他方で、インタビューは一問一答に終始しがちであったり、日本人一人に対してクラ

ス全員が順番に質問し続ける一方的なコミュニケーションになってしまったりと、会話の発展が難しいという問題点もあった。

複数の日本人留学生が参加した授業では、クラスを日本人留学生の人数と同数のグループに分けて、グループ・インタビューを行った。この授業では、インタビューの前に「日本人の出身地について聞く」という課題を与え、インタビューの結果を黒板に書き入れ、グループ毎に発表させた。グループ・ワークの場合、少人数のグループで日本人留学生と話ができるため、学生一人当たりの会話の頻度が高くなり、両国の学生の距離も近くなり、より活発に交流している様子が見受けられた。また、インタビュー後に発表の機会を設けたことで、学生たちがインタビューした意見をグループ内でまとめて発表するというアウトプットの実践も行うことができた。

3.2 日本人留学生による発表

日本人留学生がプレゼンテーションを使って日本事情について発表する授業実践を行なった④・⑤は、ミンスク医科大学に留学しているロシア語をまったく知らない学生たちが参加した。授業は日本事情の講義形式になり、日本人教師の日本事情とは異なる視点とテーマによる内容という意味では、学生たちにとって新鮮だったと思われる。ただ、日本人留学生がまったくロシア語を知らない場合、より集中して日本人の話に耳を傾けるようとする学生もいれば、理解しようとすることを諦めてしまう学生も見受けられた。発表内容が理解できなかった場合は、留学生発表後の質疑にも参加できなくなる傾向にあった。また、授業後の日本人留学生の話によれば、「難し過ぎたかもしれない」「理解してもらえなかったかもしれない」という不安が残ったという。ロシア語を解さない日本人ゲストの場合、教師が事前に日本人留学生と発表内容について打ち合わせをしたり、発表中に教師が解説を入れたりするなどの必要性が認められた。

3.3 意見交換

初級後期の学生のクラスで、日本人留学生との意見交換を行った。参加した日本人留学生は、すでに半年以上当地での生活経験があったため、両国の生活・文化・習慣の違いなどを話し合う良い機会となった。学生たちが意見を出し易い雰囲気を作るよう、最初に双方の自己紹介を導入した。

また、意見を述べることに消極的な学生については、適宜、教師が当てながら全員が意見を言えるよう促した。文化・習慣の違いは、一つ一つの意見が興味深く、それぞれについて話を深めることができるが、授業は自己紹介も含めて80分という時間の制約があり、意見を出すだけで終わってしまうのはやや物足りなさが残った。

4. おわりに

日本語能力の向上のためには、様々な日本人との生の交流が欠かせないため、教師の側にも日本人と接する機会を増やす努力が必要である。学生のネットワークなどを通じて、可能な限り定期的に日本人留学生をゲストとして招待できるような環境づくりに努める必要がある。

日本人留学生との交流授業は、普段、日本人教師以外の日本語を聞くことの少ない学生たちにとって、教科書にはない言葉や表現に出会える貴重な機会となった。特に、ベラルーシの学生たちにとって大学の授業では触れる機会の少ない若者の会話表現や略語などが興味・関心を惹きつけていた。他方で、インタビュー形式の授業は、一方的なコミュニケーションになりがちであった。また、学生たちは教科書の日本語と生の日本人の話す日本語とのギャップを感じたり、緊張や不慣れから、全体的に普段の授業よりも消極的になったりする様子が見受けられた。そのため、インタビューや意見交換の練習を普段の授業で取り入れたり、双方向的なコミュニケーションが維持できるような課題を設定したり、授業内で教師が適宜説明を入れるなどのサポートの必要性が認められた。また、授業後にベラルーシの学生と日本人留学生の双方に授業評価のアンケートを行い、改善すべき点や課題についてより詳しく分析することを今後の課題としたい。

ЛИТЕРАТУРА

1. 国際交流基金（2015）「海外の日本語教育の現状—2015年度日本語教育機関調査より—」、
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html
2. 安井朱美（2008）「留学生と日本人学生との合同授業の試み—コメントから見えてくるもの—」、『南山大学国際教育センター紀要』9、
p. 114–128.

3. 外務省「ベラルーシ基礎デ https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/belarus/data.html.
4. 西條　結人（2017）「キルギス共和国における日本語教育の現状と課題—「現地化」した日本語教育ネットワークの構築・改善を目指して—」、『キルギス日本語教師会研究紀要』創刊号2017-1、キルギス日本語教育研究
5. 藪崎義雄（2006）「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」、創価大学
6. アクドーアン・プナル（2007）「日本語とトルコ語の「ウチ・ソト」関係の対照研究」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部第56号、p. 235–239.
7. 木元めぐみ（2015）「ロシア（モスクワ）日本語教育事情」、『国際教養大学専門職大学院グローバル・コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』6、p. 7–8.
8. 小林　佶（2002）「ロシアにおける日本語教育」、ERINA公益財団法人環日本海経済研究所
9. マシニナ・アナスタシヤ（2009）「ロシアの高等教育機関における日本語教育—極東国立人文大学における日本語教育の実情と問題点」、『Forum of Language Instructors』Vol. 3.
10. 末繁美和、ケーレブ・プリチャード、ジョン・ルシンスキー（2016）「留学生および日本人学生のインタラクティブな授業の試み」、『岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要』第1号
11. クルガンスカヤ・ユリヤ（2007）「ロシアにおける中・上級の日本語話し言葉教育」、『新潟大学国際センター紀要』第３号、p. 131–137.
12. 国際交流基金　「世界の日本語教育の現場から」（国際交流基金日本語専門家レポート）、https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/dispatch/voice/voice/touou/belarus/2018/report02.html.
13. 国際交流基金（2017）「海外の日本語教育の現状と課題」、http://www.nkg. or.jp/wp/wp-content/uploads/2017/06/20170615_JF.pdf.

The purpose of this paper is to report the results of the joint class between beginner Japanese learners and Japanese students held from 2017 to 2019. We should consider the importance of offering the chances for students to interact with other cultures.